建設産業 '12年1月5日

自然の猛威に負けない国つくり

社団法人 日本建築学会
会長 和田 章

産業1/5

国民総生産の2倍の国の借金に悩む日本、中国や韓国の台頭による世界やアジアの中での存在感の薄れる日本、特に昨年は火山の爆発、大雪、大地震と大津波、秋の豪雨などの自然の猛威に曝された日本、一人当たり年に9トンものCO2排出、少子高齢化、年金の仕組の維持の難しさ、こんな不安ばかりの日本であるが、ほとんどの人々はそれほど貧しそうには見えず、街は賑い物客などであふれている。東日本大震災の復興税は25年間と決まったが、借金は26年分の税収とほぼ同じである。将来の人々が享受すべき豊かさを、現在の日本人が使ってしまっているといえる。今はもっと質素な生活をしなければならないのであろう。ただ、悲観的なことばかり考えていては新年らしくない。少なくとも2012年が穏やかな一年であることを望む。

我々5百万人以上の建設に関わる者は、日本に住む人々の生活の場、生産・産業の場、インフラを作ることが仕事であり、自然の猛威に負けない安全な土木構造物、まち、建築を作る使命があり、人々が安心して日々の生活や活動を営める国を作らなければならないと思い、東日本大震災を受けて、1万9千名をこえる尊い命が奪われ、福島県の原子力発電所の破壊によって周辺地区を30年以上も人の住めないところにしてしまったことについて、大きな責任を感じなければならない。海外の専門家は、あれほどの大地震を受けて、東北の仙台の街などがそれ以前の賑やかさを保っていることに驚きを感じ、日本の建設関係者を慰めてくれるが、我々には、二度と同じ震災は起こさせないという覚悟が必要である。

人間は自然から多くの貴重な教訓を与えられ、少しずつ賢くなっていく。21世紀が12年目になってから納得するのでは遅いのであるが、「稀にしか起こらない大きな自然の猛威に対し、それが稀にしか起こらないから、生きている間は起こらないと考えてそれほど対策を講じない。この方式をとっている限り、自然災害は減らせない。」ことがはっきりした。非常に簡単な教訓である。

人々は、一人の自分の命のスケール、目の前に建設しようとする建物の寿命を尺度に、それが襲われるかも知れない自然の猛威の大きさや性質を考えがちである。奈良に都が作られてから千3百年、江戸が始まってから4百年であるが、日本はこれから千年も1万年も生き続けるであろう。国つくりを考えたとき、一人の寿命や一つの建物の存続期間で自然の猛威を計っていたのでは足りない。原子力発電所は日本の各所に何基もあり、寿命がくれば同じところに再築されるであろう。国や都市はもちろん、原子力発電所なども、確立とは関係なく、地球のスケールで歴史を良く調べ、非常に長い期間をおいてではあるが、大きな自然の猛威は繰り返して起こることを理解し、いつかは誰かが、そして何処かが必ず遭遇すると考えて、本気で、自然の猛威に負けない国つくりにあたらねばならない。